
君が居た昨日、俺の見る明日。

スルメ・レモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が居た昨日、俺の見る明日。

【Nコード】

N99270

【作者名】

スルメ・レモン

【あらすじ】

けんぷファー 同士の戦いが終わり、ナツルはある人に告白をする！？

モバゲーでも読めます。

告白

「好きです沙倉さん」

今の俺、瀬能せのナツルの顔はどうだろうか。たぶん恥はずかしさで真っ赤になつてるだろうな。

でもこれは失敗するわけにはいかないの、できる限り丁寧に言つたつもりだ

せめて冷静でいるために今にいたる経緯とかを思い出してみた。

白いケンプファーと操られた沙倉さんとの戦いも終わり数ヶ月の月日が流れた。

今振り返れば本当にいろいろあつた。紅音あかねとの戦いに始まり会長との戦い、ケンプファーのときの自分のレズ疑惑、会長との交際疑惑などなど普通では考えられないことばかりだ。

今日は一世一代の大勝負である沙倉さんに告白する事で朝からすくなくそわそわしていて授業が身に入らなかつた。

どうやってきりだそうかとか、声がうわずりそうなどと、考え出すときりがない。

あの美人で清楚なお方に告白をするのだ、緊張をしたり考え込んだりするの当然だろう。

あんまりに考え込んだりしたせいで、教師に当てられてもしばらく

は気づかなかつた。そして放課後にさくらさんと呼んで先ほどの告白をしたわけだ。

あとは沙倉さんの返事を待つだけだ。

「え、え……と」

沙倉さんは戸惑った顔をしていたがしだいに表情が曇っていった。

「……」

その表情で後の台詞は決定したも同然だったがまだ解らないとどこかで必死にすぎる思いで次の言葉を待った。だが己の思い虚しく現実を突きつけられた

「ごめんなさい、ナツルさん……」

その言葉を聞いた瞬間には俺はもう走り出していた。そう、涙を流しながら。

拾うもの……。(前書き)

もしかしたら前話を読んでびっくりした人もいるかもしれませんが
ご安心を。いよいよ、あの人が登場します。

捨つもの……。

そして何分、いや何時間？走っただろうか。たぶんそうそう学校から遠くに行つてはいないのかもしれない。取りあえず公園に入つてブランコに座つた。

「ごめんなさい……か」

沙倉さんに言われた言葉を口に出してみるとまた涙が溢れてきた。本当はこうなることは前々から分かつていたけど自分では認めたくはなかつた。認めたら自分の支えが消えてしまいそうだったから。だが、もうその支えは自ら壊してしまつた。そう、自らの手で。

「わ、分かつて……いた、はず……なのにいっ」

己のしたことに後悔は無いはずだけど、どうしても涙が止まらなかつた。しばらく泣いていたら後ろから人が歩いてくる音がしたのでいそいで袖で涙を拭つた。

「どうしたのナツル？」

目の前にいたのは三郷さんごうだつた。

「別に……何でもない」

この顔を見て気づかない奴はいないがせめてこう言わないとまた泣いてしまいそうだった。

それを見て雫は一瞬悲しそうな表情を見せたがすぐに元の無表情に

戻った。

「そう」

そう言つと雫は何か考えた後こう言つた。

「とりあえず私の家に来なさい」

そう言つて雫は歩いていった。

いつもなら拒否していたのだが、たぶん振られて心が弱くなつていたんだろつな、雫の後についていった。

拾うもの……。 (後書き)

初心者なので文字数が少ないです。

内容は良くしていきたいですが、至らない所があるかもしれません
がお願いします。

ささやかな温かさ。(前書き)

アニメイトにて、栗会長のフィギュアの前で3時間も粘ってしまっ
たのは私だけでは無いはず。

ささやかな温かさ。

雫の家に着いてからは泣いていたことについて聞かれると思いい不安だったが、雫はそんなそぶりは見せない。暫くして雫は立ち上がって。

「夕飯を作るからちょっと待ってて」

そう言っ返事を聞かずに雫は台所に向かった。

そして数時間後には机の上に料理が並んだ。野菜炒め、味噌汁、それとイワシの蒲焼きだった。

そして雫が正面に座った後に、

「さ、食べましょう」

と雫が言って食事が始まったのだが、俺は料理に手をつけられなかった。

理由は沙倉さんに振られたことで食欲が無い所為だった。

それにしても、なぜ雫はなにも聞いてこないのかと逆に不安になる。

普通は何かあると理由を聞いてみたくなるはずなのに聞かないのは分かっているからかもしれないが、気になった。少し怖い。だが、おそろおそろ聞く。

「し、雫はその……聞かないのか」

俺がそう言つと雫は食べるのをやめてこちらを見る。

「何を？」

ワザと惚けてとほているように見えるが、表情からは読み取れない。

ナツルは少し言葉を詰まらせながらも続ける。

「気づいていたんだろ？俺がその……公園で泣いていたことを」

それを聞いて雫は。

「聞いていい事といけない事ぐらいの判断はできるわ、本人が話さないのに私が聞くのはお門違いというものよ」

と、言ってくれた

それを聞いて俺は少し安心する。

下手に慰められたら自分が惨めになるだけだっただろう。

「そうか」

改めて雫の頭の良さと周りからの信頼に納得がいった。
安心したら食欲が出てきたので俺も食べることにした。

「いただきます」

料理はさすが雫と言つべきか、かなりおいしかった。

これを表現する語彙ごいが残念ながらないのが悔やまれるが、もしかしたら無理に言葉にしなくてもいいのかな？
よく分からないが。

考えている間にも、ナツルの箸は止まらなかった。

ナツルは気づいていないが、料理を食べ始めたナツルを見て雫は優しく微笑んでいた。

食事が終了してしばしの休憩したあと、雫は廊下の方に行って何かをしていた。

数分後戻って来たので何をしていたのかと聞くと、どうやら風呂にお湯を張っていたようだ。

「先に入っでいいわよ」

そう言われたので素直に従った。

風呂場に入ると雫はいろいろな物を用意した。

「着替えは父のでいいわよね？」

「別に良いけど、借りてもいいのか？」

「構わないわ、どうせ愛人の所に入り浸っているんだから」

平然と言ってしまふのはすごいな。

「じゃあ、遠慮なく使わせてもらおう」

着替えの他にタオルを用意してもらってから雫が脱衣所から出て行ったのを確認してから服を脱いで風呂に入った。湯船の中に入ると自然と今日の出来事が頭をよぎってまた悲しみが押し寄せてきた。

「うくっ……うっ」

そしてまた泣いてしまった。

ナツルが泣いているのをドアのすぐ外で聞いていた雫は、少し胸が苦しくなった。

実はというと雫は、たまたまナツルが楓に告白をしていたのを目撃していた。

ナツルが楓に告白をするのはなんとなく分かってはいたけど、やはり好きな人が他の女に告白しているところは見るのは辛い。

そして、雫は悔しさを隠せずに最後まで見ないで立ち去った。そのあと気晴らしに商店街などを回ってから帰路についたのだが、その途中の公園でナツルがブランコに座りながら泣いているのを見つけたのだ。

それを見て、楓からの返事は容易に想像できた。

その瞬間、心の中で自分が安堵しているのが分かって雫は己に対する嫌悪感で胸を締め付ける。

ナツルが悲しんでいるのに喜ぶなんて最低だ。

そうして勝手な事だが、なんとしてもナツルを元気づけるために家に招いたわけだ。

だが、どうもうまくいっていない。

元から、こつというのは得意ではない。
人を傷つけたり陥れたりすることしかできない性格になっているからだ。

慣れないことに頭を悩ませていると、たまたまBGM代わりに着けているテレビが目に入った。

『……』というところで、最近では手絞りのフルーツジュースが流行っているのです。
しかも手で絞ることによって……』

「なるほど」

手絞りのフルーツジュースか……ちょうど良い、ナツルのために風呂上がりの飲み物を作ろう。

それに、嫌なことを忘れたい時は物を飲んだり食べたりした方が良いと聞いたことがある。

雫は試してみようと思った。

確かなことは、不確かで・・・。(前書き)

書き方を変えましたので、もしかしたら読みづらいかもしれません。

その時は言うてくだされば次話では戻します。

確かなことは、不確かで……。

放課後の事を思い出したまま風呂から上がり、雫の父の服を着てリビングに行った。

暗い気分はそうそう簡単に抜けられそうにもない。

そこでふと、気づいた。

雫がない。

「あれ、いない？」

部屋の明かりは点いているのに姿が見えない。

なぜだかさらに重い気分になった。

「もしかしたら、先に寝たのかもな」

「そんな失礼なことはいわないわよ」

少し不機嫌そうな声が聞こえて驚く。

声が出た方をみたら台所にエプロン姿でいた。

どうやらジュースを作っていたらしい。

「はい、どうぞ」

そう言ってジュースを俺に渡した。

色的に見て、たぶんレモンのジュースだと予測して飲む。

予想通りの酸っぱさがした。とどうやら正解のようだ。

「レモンスカッシュか？」

「そうよ。初めて作ったから味は保証できないわね」

保証できないなんてとんでもない。

かなりの美味しさだ。

味もしつこくないし、レモンの果肉のツブツブ感がまた良かった。

そして飲んでいる内にこころなしか重かった心が軽くなった気がした。

そして全部飲み終えてから雫に礼を言った。

「ありがとう、うまかったよ」

そう言ったら雫は驚いた顔をした。

「どうしたんだ？」雫に聞いたら少し微笑んで。

「ナツルが素直にありがとうなんて明日は雪かしら？」

残念ながら明日は晴れた。

それにしても俺は雫に素直にお礼をしたことなかったか？

「ないわよ」

うわぁっ、勝手に人の心を読みとるな。

「それより、私はお風呂に入るけどやっぱり覗く？」

「前も言ったけど覗かん」

しかもやっぱりってなんだやっぱりって。

雫に遊ばれている気がしたので少しからかってみる。

「もしも覗くって言ったらどうする？」

それを聞いた雫は妖しげな笑みを浮かべた。

「鍵はかけないからご自由にどうぞ」

うぎゃー、無理ー、雫には勝てない。

俺の少し慌てた姿を見て雫は満足したように脱衣所へ向かった。

雫が風呂に入っている間、俺はいろいろ考えていた。

沙倉さんに振られて落ち込んでいたのを助けてくれたのは雫だ。

もしこれが1人だったら2、3日は学校に行かなかっただろうし、最悪中退していたかもしれないかった。

それでもこんなに気分が安定しているのは確実に雫のおかげだった

「会長さまさまだな」

そんなことを呟きながらレモンスカッシュを飲み干した。

さすがの雫もこんなところは普通の女の子なのか、入浴時間が長かった。

それにしても、風呂上がりの雫はなんとというか妙に色っぽかった。

「どうしたのナツル、私に惚れた？」

おっと、いつの間にかじっくり雫を見ていたらしい。

「べ、別に」

さすがに雫を見ていましたなんて糞だから言わない。

「まあ、いいわ」

「それより上に行きましょう、部屋へ案内するわ」

「また一緒の部屋なのか？」

雫は一瞬、目を見開いていたがすぐに妖しい微笑を浮かべた。

「今日は特別に父の部屋を使わせてあげるつもりだったけど……
……もしかして一緒が良いの？」

「いえ、結構です」

一緒なんてしたら喰われてしまう。

「つまらない男ね」

なんて雫の台詞を華麗にかわして部屋に案内してもらったため背中を
押した。

案内された部屋は白を基調とした質素な部屋だった。

俺は布団に入らないで壁側に身体を傾けるようにしてベッドに腰掛

ける。

瞳を閉じてみると音がなく闇が押し寄せてくるような感覚になり自分が部屋に独りなのだと思覚する。

自覚するとまた胸が苦しくなる。

ヤバい、泣きそうだ。

目の奥が熱くなる。

孤独を振り切るように部屋を出た。

「何してるんだ俺は」

俺は気づけば雪の部屋の前にいた。

どうしてここに来たのかは解らない。

「ナツル、そんな所で何をしているの？」

入ろうか入らないか迷っていたら背後から話し掛けられた。

どうやら雫は水を飲みに行った帰りらしい。

「いや……その……」

「夜這いかしら？」

雫は、妖しくも淫靡いんぴに答えた。

だから俺は素早く答える。

「ち、違う!!」

「あら、なんで動揺してるの？」

俺は黙る。

そんな俺を見て雫はクスツと笑って「嘘よ」と言った。

「ナツルが夜這いするほど度胸がないのは分かっているわ。私に何か用があるのでしょ？」

「ああ、そうなんだが」

「ここで話すのもなんだから私の部屋に入りなさい」

そう言って雫は、ドアを開けた。

前にも思ったが、雫の部屋には本人に似て部屋は必要最低限の物しか置かれておらず、なんとも飾り気のない部屋だ。

雫は部屋の扉を閉めて自分のベッドに腰掛けた。

ギシッという音がやけにうるさく響く。

雫は、自分の隣をポンポンと叩いて座るように促した。

俺は素直に従って隣に腰掛ける。

またギシツという音が響く。

俺は呟くように話し始めた。

「俺、本当は分かっていたのかもしれない」

「・・・・・・・・」

そんな俺を雫は無言で聞いている。

「あの人は最初から俺を見てなんかいなかった」

「それでも俺は諦められなかった。

同じ人物ならもしかして・・・・・・・・そんなのは甘い考えだった」

「あの人のとっては男の自分と女の自分は全然別の人間なんだ。
代わりになんてなれなかった」

すると、先ほどまで黙っていた雫が口を開いた。

「ナツル、あなたはそんな事を私に言ってどうしたいの？」

「いや、その……」

「私は前にナツルに言ったわよね？絶対に失敗するって。それでもナツルは沙倉に告白したわね」

雫は自分でも酷いことを言っていると自覚しているが言わなくてはならない事だと思っ。

「……」

ナツルは黙って聞く。

「でもナツルは後悔をしたの？」

「それは違う」

後悔なんかしていない。

例え失敗していても。

「後悔してないなら良いじゃない、後悔していると自分を否定するのと同じじゃないかしら」

確かに、俺は全力で告白をした。

それを否定する事なんて出来るわけがない。

「ああ、そうだな」

何となく俺は救われた気分になる。

俺は沙倉さんにふられたのがショックなものもあるが、自分を否定しそっくなっていたのかもしれない。

あっさりと心の支えが無くなり崩れてしまう自分をなんとかしても否定したかった。

だが、崩れてしまったら治せないなんてことは無いはずだ。

人は恋をして、失敗してもそれで終わりではない。

人は変わる、変わっていくんだ。

「ありがとう、雫。おかげで少し楽になった」

「あら、嬉しいことを言ってくれるわね」

「もう少し出会うのが早かったら惚れてたのは雫だったかな……」
「？」

言い終わると、ものすごい眠気に襲われてフラフラした。

「眠いの？少し横になっただら？」

俺は雫に言われると同時に意識をシャットアウトした。

その時の雫の横顔が少し赤らんでいたのが印象的だった。

新たな朝に・・・。(前書き)

朝ですか・・・寒いですね。

この話はじっくり、授業の時間を使って(！?)書き上げました。

新たな朝に……。

朝がきた。独特な透き通るような空気。

俺は目を開けた。時刻はまもなく4時。

薄暗いがカーテン越しに見た空は青かった。

やけに早く起きたが、よく寝ていたと身体が教えてくれる。

だけど、もう少しゴロゴロしても罰は当たらないだろう。

仰向けの状態から横に転がる。

すると鼻先数センチに雫の顔が登場。

「……………!?!?」

驚きで声が出そうになったが、なんとか抑える。

そして慌てて、仰向けの状態に戻る。

しかし、なんで雫が？

もしかして夜這い！

つて、そうだ。俺が雫のそこに行ったんじゃないか。

そしていろいろ話しているうちに眠くなって今に至ると……………。

雫を起こさないように俺は、上半身だけ起こす。

いつもは敵対心を向ける相手だが今回で、かなり雫のイメージも変わった。

「よし、こいつの寝顔を覗くか」

さっきは慌てていたのでよく見れなかった。

ゆっくり雫の方に顔を向ける。

「……………」

よっぽど笑ってやろうかと思っただが、笑えなかった。

本当にここで寝ているのは雫か？

そう思うほどの綺麗さだ。

まあ、もともとの素材が完璧だから当然といえば当然だが。

人間は、寝ているときに素顔が出ると言われているが、なんだか引き込まれるような………って、雫相手になに賞賛してるんだ俺は。

「それにしても、綺麗だな」

自然と出た科^{せいせ}白だが、返ってくるわけもない。

「ファン会員が街の8割なんて噂はホントかもな」

雫が起きていたら絶対に言わないことをアレコレ言う。

そう、返ってくるはずがない。

だが、そんな展開は作者……ゲフン、ゲフン。間違えた。

基本的にナツルの味方をしない神さまは許すはずがない。

返ってくるはずがないと思っていたのに返事が返ってきた。

「そう言って貰えると寝たふりしていたかいたわ」

「!？」

な、なんですとー!

ワナワナと身体を震わせる。

「い、いつから……」

「ナツルが起きる少し前から」

「ってことは今のも・・・」

「ええ、バッチリ」穴があったら入りたいとはまさにこのことだ。
恥ずかしさに頭を抱えた。

「ナツルの寝顔もかわいかったわよ」

なんとという不覚。

恥ずかしさのあまり、掛け布団を被って緊急回避に突入。

「あら、イジメ過ぎたかしら」

「・・・」

俺は無視する。

「ナツル、出てきなさい」

「・・・」

ユサユサと肩を揺らされるが、俺は無視を続ける。

「もう、イジメたりしないから」

「・・・」

俺はさらに無視をする。

「そう。そっちがその気なら私にも考えがあるわ」

「・・・・・・・・!?!」

ゾクツ、俺は恐怖を感じたが、なけなしの意地で無視を貫く。^{しんぞ}すると、雫の手が俺の背中に置かれた。そして虫みたいに奇妙な動きですりあがってくる。

動くたびにゾクツ、ゾクツ、となつて変な気分になる。

そして手が肩まで届いて・・・・・・・・我慢できずに俺は飛び起きる。

「うつひゃー!?!」

そして部屋の端に退避。

雫の顔を恐る恐る見ると、イタズラが成功した子供みたいに嬉しそうに笑っている。

「やっぱり、寝てる顔より私を見てくれる顔の方が断然かわいいわよ」

「・・・・・・・・」

なんだかずるい。そんな表情をされたら怒ろうにも怒れないだろ。悔しいが、自分の心は騙せないらしく、うるさいほどに高鳴っていた。

朝食は特に話すこともなく静かに食べた。

息が詰まるような沈黙ではなく、何と言えば伝わるだろうか。

温かい気持ちになれると言っべきか。
そんな朝食を食べ終えて俺たちは学校へ向かう準備をした。

「それじゃ、先に行くわね」

「ああ」

家の前で雫を見送る。

俺は雫に、バラバラに登校すると朝食の間に話した。

さすがに天下の無敵会長様と登校なんかしたら暴動が起こる。

雫はそんな事を心配する必要はないと言っていたがそんなわけには
いかない。

なぜか雫はこちらをチラツと見て歩いて行く。

言葉には出していないが、一瞬だけ見えた顔は心配そうな表情をし
ていた。

意外と心配性なのかもしれない。

「さてと、行きますかね。心配性な会長様が倒れてしまう前に」

わざとふざけた調子で言うのも、素直にありがとうとは言わないナ
ツルなりの嬉しさを誤魔化すための照れ隠しである。

そして、ナツルはまず無いと思うが、万一を考えて雫の行った道と
は違う道を目指した。

ナツルがその場を去って数分後にコンパクトデジタルカメラを片手

に持った少女が現れた。
それには明るい気配は無く、カメラを握り締める手に血の気が引いており青白くなっていた。

「・・・・・・・・っ」

歯をガリッと砕き怒りで顔を歪める。

少女が思うのはただひとつ。

どうして彼が会長と一緒にいるの？

少女はたまたま通り掛かっただけ・・・というのもあるが、何かスクープになるものは無いのかと遠回りをした。

実際にスクープになるものはあったが、それは少女にとっては愉快になれるものではなかった。

なのにデータを見ればその忌まわしき瞬間が撮れており、ブレやボケが一切無い決定的な証拠写真だ。

ギシッとカメラが軋む。

少女はあることを思いつき、それを実行するために走る。

後には秋特有の乾いた風がひとつの枯れ葉を巻き込んで吹いていた。

それは強く見えて弱いものであり……。 (前書き)

リアルさを追求したらなぜだか重めの内容になってしまいました。

そもそも東田が別人！

それは強く見えて弱いものであり……。

ナツルは登校途中にある武田商店という雑貨屋の前にあった自動販売機から、どろり濃厚ピーチ味なるきわもののジュースを買ってみた。

「ん？クソ、内容物がストローを通らないだと！」

予想以上の強敵に悪戦苦闘する。

美鈴に出来て俺に出来ないことはない！

顔を真っ赤にしながら吸うと、ちょびつと出てきた。

「これは……意外といける！」

そうと分かるともつと食べたくなる（？）ので思いつ切り吸い込みだり、逆さにしてみたりした。

そして分かったことは、手で押しながら吸うと簡単に食べれるということだった。

新たな発見に1人にやにやしつ、校門が見えてきたあたりで気が付く。

注目されてる。

普段のテンションなら、遂に俺の魅力に気づくやつらが出てきたかなんて思っただがどうも違う。

ムサイ野郎共からまでもこっちを見てくる。

10人に1人は同性愛に目覚めるやつもいるらしいが、そんなものは認めない。

とりあえず下駄箱に靴をしまいながらそんな日もあるかもなんて楽天的な考えで教室に向かった。

教室に入ると、いつも騒がしいのが取り柄のクラスが痛いほどの沈黙に包まれており、冷たい視線がナツルを刺す。おかしい、こんなことは今までなかった。ナツルは寒々しく思いながら席につくと、周りは俺を見ながら隣の人と話し出した。

「・・・ナツル」

気味悪く思っていると東田が暗い顔でこちらに近づいてきた。こいつは笑った顔しかイメージがないぶん驚く。

「おい、東田。どうしたんだよ？」

問うが、「ああ」という曖昧な返事しか返ってこない。会話が續かないまま数分が過ぎ始めた時、やっと東田は口を開く。

「なあ、ナツル。ひとつ、聞いて良いか？」

「なんだよ、改まって・・・まあいいよ」

口を一回開けたり閉めたりをして言いずらそうに話す。

「友達が昨日な、ある人を見かけたらしいんだよ。そいつは、女連れで公園のそばを歩いていたらしい」

ナツルはなぜ東田がこんな話をしているのか分からない。
そんなナツルの疑問が浮かんだまま話は進む。

「まあ、カップルなんて別に珍しいものではないから俺はそいつの話を半分で聞いてたんだ」

だがな――

「だがな、そのカップルの名前を聞いた瞬間に俺は耳を疑った。
そんなはずはないと思って何度も聞くが間違いないらしい」

「・・・」

ナツルはなぜか嫌な予感がした。
それはなんとなくだったのだが、東田が次に言った言葉はそれが正しかったことを告げた。

「なあ、ナツル。そいつはさ、お前だつて言つてたんだよ」

ゾクンと背中が冷たくなった。
胃のあたりが締め付けられる。

これ以上は聞きたくはない。
だが、話は続く。

「俺だつてそれだけなら鵜呑みになんかしない。だが、朝にこんなものが配られてたんだよ」

東田はポケットから少し折りたたんである紙束を机に出した。

それは新聞部が定期的に発行している新聞であった。
震える手で新聞を開き中を読む。

そこにはひとりの男が告白して振られた直後に他の女と歩いていたことなど、その男がどれだけ愚かなことをしたのか事細かに書かれていた。

「ナツルが昨日、沙倉さんに告白したことは知っているし、その背中を押したのも俺だ。」

お前が沙倉さんをどれだけ好きだったのかも分かっていたつもりだよ。

「ただ、あんなことされたら、いくらバカな俺でも失望する。」

「だけでもし、違っつてんなら誰が何を言おうが俺はお前を信じるよ。どうだ？これは間違っている情報なのか？」

肩を痛くなるほど掴んでナツルの一番の親友は聞いた。

俺は辛くて苦しくて逃げ出したい気分でした。

「だが、答えなくてはならない。」

「一瞬、嘘を言うことを考えてしまったが抹消した。」

「それは一番やってはならないことだからだ。」

「だから残るは・・・言わなくても分かるだろう。」

「しかし、これを言ったら嫌われる。」

「いや、俺はそれだけのことをしたんだ言うしかない。」

「ナツルは重たい唇を開き短く告げる。」

「・・・間違っではないない」

その瞬間、ナツルは殴りつけられていた。

身体を机にぶつけて椅子から滑り落ちる。

東田はこれまで聞いたことのない声で怒鳴った。

「ナツル、お前は一番、やってはいけないことをしやがったな！」

ただでさえ静かだった教室は物音すらしなくなった。

「ああ、そうかい。これは本当ねえ。

ってことは何だ？俺はお前のお遊びに騙されてたつてのかわよ！？」

騙したなんて・・・そんなことは絶対にやってない。

「それは違……………」

「違わねえよ！」

否定しようとしたらかぶせられた。

「だって、お前のしたことはそういうことだろ？

それが遊びじゃなかったらなんなんだよ！」

「それは……………」

言い訳が思いつかないので言葉が詰まる。

それがいけなかった。

「あつそ、答えられないね。ならいいや、答えなくても。その代わりに、もう話しかけてくるな。こっちがイライラするから」

そう冷たく言い捨てて東田は背を向けて席についた。

何も言い返せない。

今の俺が何を言っても嘘っぽく聞こえてしまう。

またナツルには視線が突き刺さる。

その目はこう言っていた。

『いいい身分だな』と。

「……………」

ナツルは耐えきれなくなり教室を飛び出した。

ナツルは学校から外に出てそれなりに広い川の土手沿いを歩いていく。

下駄箱に向かう途中で何人かの生徒にも会ったが、明らかな軽蔑けいべつの視線を向けられる。

あの記事が嘘であるのならば弁解べんげの余地があるが、すべて本当の事だ。

後悔と自分の愚かさに胸が苦しくなる。

「つく、つう……………」

東田に殴られた頬がジンジンと熱を持って痛い。

だが、それよりもあいつの『ナツル、お前は一番やってはいけないことをしやがったな！』が一番痛かった。

土手から道路に登る傾斜地の芝生に力無く座り込む。

そして空を見上げた。

俺の気持ちとは真逆に空は雲一つない快晴だった。

そう言えばあの日もこんな空だった。

ナツルは沙倉さんに告白する約1ヶ月前を思い出す。

ナツルはスプーンを目から光線が　ズババアーン　と飛び出しそう
なほど見つめる。

それはもう修羅しゆらという言葉が似合うに形相かたちで。

「っよう、ナツルう〜」

今日もまた暑っ苦しいやつが寄ってくるが無視。
俺はいま、お前と違って大変に忙しいのだよ。

「ううっ、ううっ！」

再びスプーンを持つ手に力を込めてサイレンのように唸うなり始めた。
東田は訝いぶかしげに眉をひそめて聞く。

「うーうー唸って何やってんだよ！」

それに対してナツルは目をスプーンに固定してそんざいにこたえる。

「うるさい、これは俺の未来の為の呪いなんだよ!」

「呪いい!? なんじゃそりゃ!」

俺は驚いている東田に一冊の冊子を突きつける。

それを受け取ってペラペラと流し読みしている。「ええっと……なにになにい?」意中の相手を必ずものに出来る占い』だとお?」

東田は読んでいて嫌な汗がダラダラ流れる。

いろいろツツコミどころが満載だ。

なぜ必ず成功するはずなのに占いなのかとか、なぜホラーものみたく文字が血文字なのか。

そして、なぜこの怪しさMAXのものに引つかかるのか。

東田は我が友ながら頭が痛い額に手を当てる。

そしてその友はキラキラと目にお星さまを輝かしてこちらを見ると宣言した。

「俺は決めたのさ、1ヶ月後の冬休み前に何としてもやらねばならない」

「やるって何を?」

「沙倉さんに告白する!」

俺がビシツとかつこよく決めたのを東田は半目で哀れみの視線を向ける。

「……あゝ、はいはい」

また始まったよ的な顔をして東田は席に戻ろうとした。それを腕を掴んで引き止める。

「おい、何を貴様は、勝手にやって自滅しる的に去りやがる」

「よく分かってるじゃないか瀬能さん」

よくできましたと拍手をする。

「それは問屋が許さんというものだよ東田さん」

拍手している手を払って否定する。

東田はそれを気にしないでナツルを睨む。

「お前のそれ（沙倉さんに告白）は何回目だよ！先月もそんな事言ってたよな！？」

「い、いや、それはだな」ナツルは目をそらしてくねくねし始めた。

「もじもじするな気持ち悪い」

するとナツルは肩を掴んで真剣な顔をして言った。

「今回は本気なんだよ」

「それも何回も聞いた」

「それでな、東田に頼みたい事が……」

「いやだ」

即答した。

「まだ何も言っていないが」

ダラダラと冷や汗を流す。

「どうせ相談にのってくれとかだろ？」

一方、東田は半眼でナツルを睨んだ。

「なぜそれを!？」

「それがお前の毎度のパターンだからだろうが!！」

東田は怒鳴って指を突きつける。

それを見てペアと明るい表情にさせる。

「分かっているなら相談に……」

「だからいやだ」

「なぜ!？」

「なぜだと？」

東田は地の底から響くような声になっている。
格闘マンガだったら目が赤く光っていたであろう。

「それはだな……。ひとがせっかく真剣にアドバイスしてやつても土壇場で逃げるからだろうが!!」

やけに血走った目が怖い。

「あ、いや、それは……」

オロオロし始めて目がかなり泳いでしまった。

そして東田は、はあと重いため息を吐き出して小さく呟くように言った。

「……るよ」

「え？」

ナツルは絶望に陥おちいっていたので聞いていなかった。

「だからアドバイスしてやるよ」

バツと顔を上げて声を大にして喜ぶ。

「え、マジ!? ありがとさん」

なんていい奴なんだよお前ってやつは。思わず目頭を抑えた。

だが、喜んだのはつかの間。

「ただーし、一つ条件がある!」

と言われて驚く。

「え、条件？なんだ」

すると東田はニヤリと笑ってその条件とやらを言った。

「女子部の最新情報」

まあ、そつだよな。

忘れていたがこいつは美少女研究会の会長だった。

「ああ、それでいいよ」

ナツルは笑い顔を隠しもしないで笑った。

あの頃は何をしても楽しかった。

モテるにはどうしたら良いのか。

沙倉さんならどんなことをすれば喜ぶのか。

その時どんな事を言われるのか。

一緒にお出掛けするときの服の選び方。

季節別のデートコース。果ては最高の勝負パンツの入手方など。なんでも馬鹿みたいに騒いで時には周りも巻き込んだりもした。

だけど、もうあの日には戻れない。

どんなに求めても、悲しくても……。

壊したんだ、すべて。

自分のどうしようもない他力本願な性格で。

「ふはは、ううっ。っく……うあ」

自分の行いおこなに対して笑おうとするが、嗚咽おえうが混じってうまくいかない。

悔しさで草を引きちぎりながら苦しげに笑った顔で泣いた。

それは強く見えて弱いものであり……。 (後書き)

すみません、また会長の出番がありませんでした。
次話はちゃんと出てきます。

それはあなたの為に。(前書き)

ナツル×栗が売りなのになぜか出番が少ない会長が出陣。

ゴーゴー！

それはあなたの為に。

雫は今、ある場所に向かっている。

それは朝の登校してすぐにもらった新聞部の号外を見たからだ。
腸はらわたが煮えくり返るとはこの事だと初めて感じる。

そう、冷酷な会長を演じ続けてきた彼女はこれほどまでにないほど怒っていた。

新聞部部室に着くと最低限の礼儀としてノックをして入室の許可を得る。

入ってみると中は案外綺麗で、機材が入り乱れていることはない。それもそのはずで、機材はすべて隣の印刷室にある。ここでは企画や会議を話し合う場所なのだ。

ホワイトボードがあり、その真っ正面には折り畳み式の長机が2つ向かい合わせで並べてある。

どこかの会社の会議室と言われても疑う人はいないだろう。

机のホワイトボード側に座っている少女、来栖くるす智美さとみはわざとらしくニコニコ微笑みながら雫を見る。

「まあ、立ち話もなんですからあゝ、座って下さいねえ」

彼女は入学当時から新聞部に所属しており、新メンバーでの初版の新聞に独自の半面にわたる記事を載せている。

新聞部は原稿をそんじょそらの素人に書かせるような甘いものではなく、コピーや片付けなどをしながら実績を上げ、それからやっと小さな自分が好きに書けるスペースを貰えるのだ。

中には卒業まで何も書けないで終わる場合もあるらしい。

それを入学したてで、しかも半面とは……。

部長になった今の姿を見るとかなりの実績と信頼きずを築き上げてきた

のだろう。

雫は、ニコニコとどこか違和感を感じる微笑みを無視していきなり本題に入る。

「単刀直入に聞くけど、これは何？」

雫はコピー用紙の束を机に無造作に置く。

それにたいした反応を見せずに智美は答える。

「これは私たち新聞部が作り上げた新聞ですねえ」

軽い態度に少しイラっとして バンツ と机を叩いた。

「それを聞きに来たわけではないわ。この内容は何かと聞いているの」

その内容はある人物の事を徹底的に薄汚く書いてある。

その時点で、その人の気分を害することや、最悪は登校拒否などの原因になるので学校側からは取りやめさせることが可能だ。

「あれえ、これを止めさせるのですかあゝ」。

書かれている内容は、少し誇張が入っていますが嘘ではないですよええ？

まあそれはそうですねえ、これでは会長の名に傷がついてしまいますう。

そこは何としても止めさせたいですよええ？

大袈裟な身振り手振りに雫は「いいえ違うわ」と遮る。

「そうじゃないわ。私は生徒の気分を害する記載をしないように注

意しにきたの。私の名が傷つくのは構わないわ」

「ホントですかあ？」

「ええ」

智美はクスクスと笑い始め、手を顎に添えて目を細めた。

「それはおかしな話しですねえ」

「何がおかしな話しなの？」

「一つ聞きますがぁ。」

それならどうして、まずみさんが書いた女性のナツルさんのレズ疑惑の記事は注意されてなかったんですかあ？

優秀な会長さまが気づかないなんてことはありませんよねえ？

あの記事と朝の記事の違いが私には分かりませんよあ」

表情に出さないが、雫は少し動揺する。

確かに今までにこのような記事を取り上げたのはいくつもある。

苦情の報告がないので保留にしておいたのがまずかった。

さらに智美の追撃がきた。

「新聞部でも苦情などに対するアンケートBOXを置いてあるのでそれが有るなら直しますがぁ、それも無いようですしねえ。

それなのにこちらに会長が直々に来るなんてえ、何か理由が有るのでしょうかあ？

有るのでしたら教えて貰えませんかあ、私も新聞記者の端くれみたいなものですので気になりますう」

人を小馬鹿にするような薄ら笑いをしてくるのを冷たく睨みつける。雫はこれらに対応する言葉を用意していなかったわけではない。すう、とゆっくり呼吸して熱くならないように努める。

「生徒会の方に直接苦情がきたの、だから私が来たのよ」

何の感情を示さない、抑揚のない声で選んだ言葉を出す。

もちろんこんなのは嘘なのだが、そんなことは大したことではない。相手に釘をさしに来たのだ。

厳罰を与えに来たわけではない。

無理に抑えてしまうと後々、どんな影響があるのか分からない。だから注意して「これ以上はダメ」だと分からせるだけでいい。さらに雫は、相手に反論させないように続ける。

「活動を中止しろだなんて言わないわ。

その記事を取り消して、今後は出版前に生徒会に提出して許可を得るように。」

私が、不適切だと思うものには許可をしないわ」

少し強引だが、間違ったことは言っていないだろう。

部活はあくまでも学校生活を充実させるためのものであって、それを阻害することはあってはならない。

「はい、分かりましたあ。

私は新聞部を潰したいわけではありませんしい、他人を不幸にするようなことはしたくありませんからあ、受け入れましょうあ」

智美は微笑みを崩さないでその条件をのむ。

「それでは、私はこれで」

言うことは言ったとばかりに雫は立ち上がり、部屋から退室しようと扉の近くに行く。

ドアノブを手に掛けたときに智美がポツリと独り言のように話しました。

「でしたらこの写真はどうしますう？」

せつかくナツルさんと会長が仲むつまじく家から出てくる衝撃的な写真なんですけどお」

「え？」

自分が露骨に反応したのを自覚してはいるが、それどころではない。雫が振り向くと、智美はこちらを見ないで写真だけ ヒラヒラと動かしている。

そこには智美の言った通りナツルと自分が共に家からでる姿だった。

「これは生徒会長として正直まずいですよねえ」。

事實はどうであれ、どこどうみても風紀的によろしくないですう。

教師にバレたら退学ものですよお？」

雫は苦虫を噛み潰したかのように顔をしかめる。

それは、けして自分が退学になるのを恐れてではない。

ナツルにまで被害が及ぶのが分かるからだ。

「なにもこれで脅すなんてことはしませんよお。

さっきの話は私も従いますう。

ただ、私の活動を少し許可していただければそれでいいのですのでえ。ご安心くださいあゝい。

私の活動が終わり次第に消去されるようにい、設定いたしましたの

「
でえ」

この言葉がどこまで信用できるか分からない。すべて嘘の可能性もある。

だが、従わなければならないだろう。

それがナツルの、私の愛する人の為。

たとえ、一方通行な想いだとしても、この意思は変わらない。

「詳しくわあ、後日にでもお直接生徒会室に伺わせてもらいますう」

「

智美は瞳を弓のようにしならせて ニタア と気味悪く笑う。

「.....」

雫は自分の詰めの甘さに悔しい気持ちになる。

それを隠すように無言で部屋を出て行った。

悲しみを与えるのは誰なのか？ 配点（幻想）（前書き）

タイトルを『境界線上のホライゾン』みたいになりました。

悲しみを与えるのは誰なのか？ 配点（幻想）

放課後、雫は星鐵学院前の坂を歩いていた。

本当ならこの時間帯は生徒会室に行かなくてはならないが、前日の内にやることは終わらせたので他の役員たちには今日は話し合いはやらないと言ってきた。

あの真面目一徹の会長が話し合いをやらないなんておかしいなんて小声で話しているのを聞いたが、雫には関係ないことだ。

それより気になることがある。

それはナツルの事だ。

一応、あの記事が不適切だったという文を書いてくれるという話にはなったはずだ。

だが、あのナツルの事だ。変にマイナスに考えて自分を責めていないだろうか？

辛いことがあった人間はマイナス思考に陥りやすい。彼は良くも悪くも人一倍、感受性が強いので心配だ。なにか私にも彼の助けが出来るはずだ。

彼の悲しむ顔は見たくはないから。

そんな決意をしながら商店街からはずれていつもの帰り道である土手へと登る。

すると見覚えのある目が覚めるような青い髪さの男が仰向けで寝転んでいるのを見つけた。

「ナツル？」

あんな男は1人しかいないし、他にいたとしても見間違えることはないであろう。

近づいてみると、目を閉じて浅い寝息を吐いていた。

「……すうー……」

「ふふっ」

ナツルらしいと雫は思った。

どこでも自分出していて、イタズラされるかもしれないことを考えてはいない。彼女は、それを微笑ましく思っただけで自分の心配は杞憂に終わったと思いがちだが、あることに気がついた。

それは良い事などではなく、雫の胸を締め付けるには十分なほどのものであった。

「泣いて……いたの？」

目の端を流れるように悲しげなラインがあった。

そう、ナツルの顔には。涙の流れた跡が残っていたのだった。

ナツルはなぜか教室にいた。

夕方の教室にはまだまだクラスメイトがおり、いつものように賑わっている。

楽しげな声、その中でも俺の親友である東田はいつも以上に嬉しそうに話しかけてきた。

「またコンパしようぜナツル！」

俺は理解出来なかった。

けっして、コンパの意味が分からなかったからではなく、今の状況が理解出来なかった。

だって、俺は東田に嫌われたはずだろ？それなのになぜ。

「おい、ナツル。なにぼーっとしてるんだ？」

「いや、東田。お前に俺は嫌われていたはずだろ？」

すると、東田は「は？」と素っ頓狂な声を出して驚いた。

「俺がナツルを嫌った？」

「ああ」

「なぜ？」

「俺が沙倉さんに告白したあとに会長と一緒にいたから……」

一度、東田は真面目な顔になったあと、急に肩を震わせた。

それは怒りから来るものではなく、ただ笑いをこらえているだけだった。

「ぶぶっ、あのチキンハートのナツルが……くくっ、告白う？」

今度はナツルが驚いた。

あの出来事を覚えていない？

騙されている可能性もあるが、嘘をついているようには見えない。
第一、嘘をつく理由がないのだ。
考えを巡らせている間にも、東田は笑い続けている。

「しかも相手は、あの沙倉さんだって？いくらなんでも有り得ない
だろ。夢でも見てたんじゃねえか？」

「……ゆ……め……？」

東田が言ったことを繰り返す。
そうか、あれは夢だったのか。
俺は嫌な悪夢を見ていたんだ。

「あー、確かに夢だな。なるほど」

「なに1人で自問自答をしてんだよ」

「いや、何となくな」

おかしな奴だと東田は笑って俺も笑う。
そう夢なんだ。

全部なかったんだ。
沙倉さんに告白したことも、雫に慰められたことも、東田に殴られ
た事もすべて……。。。
そう思い込もうとしたら、どこからか声がした。

『すべてなかったことなんて出来ないわよ』

聞き覚えがある声。

だが、誰だろう？

『ナツル、あなたのする事は現実から目を背けることかしら?』

やめてくれ、せつかくすべてが夢だったんだから。

『違うでしょ、あなたは現実を見なくてはいけない。たとえそれが自分にとって嫌な事だとしてもね』

やめる・・・やめてくれ。おれはもう、辛い思いはしたくないんだ。『目を開けなさい、そして現実を見るの。幻想はしょせんは幻想でしかないわ』

違うちがう・・・げんそうなんかじゃ。

『辛いなら私に言いなさい。』

あなたが辛くないようにしてあげるから』

温かい風が吹いて景色が崩れていく。

楽しそうに笑っているみんなや、東田もすべて。

ナツルは目を開けた。

なぜか自分は寝ていたらしい。

そしてさつきまで何か夢をみていたはずなのだ。
思い出せないが心地が良くも辛いのは分かった。
そして目の前にはなぜか雫が居た。

「ナツル、おはよう」

「……っ」

雫にあいさつされたけど言葉が胸につつかえて返事が出来なかった。
それでも何かを言おうとして、震える唇を開いた。

「……あ、あの……さ……」

だが何を話たら良いのかわからずに焦る。
だが、そんなナツルに雫はなにも言わないういからと、人差し指を
ナツルの唇に添えて優しく抱きしめてきた。

「!?!」

雫の温かさに目の奥が熱くなり、視界が歪んだ。
心の奥底で抑えつけておいたものが込み上げてくる。

「……っく……っう」

タガが外れたように止まらなくなって、嗚咽を出しながら雫にナツ
ルも抱きついた。

「あの……さ。おれ……なにも、かも……失っ、て……
……っさ……っくっ」

雫は背中をさすりながら黙ってナツルが話そうとしている事を聞いている。

「自分で、したこと……だからさっ……でも！」

ナツルは瞳を大きく開いて流れる涙を止めようとするが止まらない。

「なんで、かな？……おれ。やっぱり、かなしいよ」

ナツルが悲痛に叫んで雫に抱きつく腕の力が強くなった。

もしかしたら痛いかもしれない。

痣ができているかもしれない。

だけどナツルは雫を離せない。

雫に触れているとあつたかくなることは自分でも分かっているから。

ごめん、自分でも我が儘なことは分かっている。

だけでももう少し……。

雫はナツルを抱きしめながら思った。なんで彼がこんなに悲しい思いをしなければならぬ？

彼はただ好きな人に告白しただけなのに。

神さまはやっぱりいいことだ。

いるのなら、こんな酷い神さまなんて私はいらぬ。

「うあ、うくっ・・・あ」

ナツルが嗚咽をするたびに胸が苦しい。

この原因は、私にもあるのだ。

甘い考えでいるから詰めを誤る。

智美とのことだって・・・先輩の事だって。

偉そうなこと言っておいていざというとき役にたないでは、はなしにならない。

だけど悔やんでもしょうがない。

私はやらなければならぬことが増えた。

負けのままは嫌いだ。

だから、まずは・・・。

雫はナツルを抱く力を少し強くして思考の海につかる。

紅い光が差し込む薄暗い閉鎖的な空間に2人の影が向かい合っていた。一方は新聞部部長の智美と、あと一方は逆光で顔はよく分からないがシルエットで女だと分かる。

「一応わあ、言われた通りにしましたけどお。これにい、何の意味があるのですかあ？」

智美は雫に見せた写真をピラピラ振って女に問う。

この写真には記事にすれば一年間は引つ張ることが出来るたいへん面白いネタだが、所詮はその程度しか価値がない。退学させるどころか、注意されるだけだ。

この女には写真が欲しかったので協力しているが、何を考えているか解らない。

「意味があるのかないのかは後々で分かりますのでこのまま続けてください」

短くそう告げて女は出て行った。

写真は手に入ったので智美があの子に付き合っただけやる義理はないのだが、まだまだ協力している。

「まあ、私は楽しければあゝそれでいいんですけどねえ」

ひとり、ごちてバンサーイをするように両手を上げる。

智美は快樂主義者だ。

毎日が楽しければ良い。

そこに少し刺激的な要素が加わればなお良し。

そうやって出来た記事は素晴らしいものになる。

それがたまらなく、その快樂を求めてまた書き始めるを繰り返して今に至る。

だからそのためなら何でもするのだ。

「でもお、私に被害がくるのはあ許せませんねえ……少し対策を練っておきますかあ」

その眩きは陽が落ちた部屋の暗闇の中に消えていった。

悲しみを与えるのは誰なのか？ 配点（幻想）（後書き）

なんだかいつぱい詰め込み過ぎた気がします。

分ければ良かった。

〈番外編〉 ツンな彼女がデレるまで。（前書き）

良い文が思い浮かばなかったのと諦めず、違う人物の視点で書いてみました。

はっきり言いますが、キャラを似せる気はありません。

本編の方は頑張って書いておりますのでもう少し待って下さい。

く番外編く ツンな彼女がデレるまで。

誰もいない寂れた公園にひとりの男がいた。
ひがした・みきひと
東田幹仁だ。

ナツルが教室を出たあとに授業を受ける気分ではなくなったので1
時限目が終わると同時に鞆片手に幹仁も教室を出て現在に至る。

幹仁は滑り台の上に寝転んで空を見上げるかたちだが、その目は親
友を殴った右手を睨みつけている。

思い出すのはつい先ほどのこと。

『・・・間違っではないない』

そう告げられた瞬間に頭が真っ白になった。

俺はあいつの事を一番分かってやれていたはずだ。

良いところや悪いところすべて。

あいつがあんない加減な事をするはずがないって思っていたのに。

「クソっ、何でだよ！」

ガンっ、と手すりを殴るが痛いのは自分だけだ。

怒り、悲しみ、悔しさとすべての負の感情が出てきて止まらない。

「ぐっ、うく・・・うう」

やるせなさが涙になって溢れてくる。

そんな幹仁の頭上が暗くなったと思ったら激痛が走る。

「ぐふあっ!?!?」

涙もすぐに引っ込んだ。

痛みへのうち回って何が起こったのか理解できない。かろうじて分かるとしたら誰かに踏まれたという事だけだ。その踏んだ張本人はというと……。

「あれ、何か踏みましたよ？」

軽い！反応が超軽い！

「まあ、気のせいですよね」

声からして若い少女だということは分かるのだが、痛みで視界がぼやける。

とりあえず声は出るので反論する。

「……んなわけ、あるか！」

低い声で怒鳴ったつもりだが少女には堪えないらしい。

「おっと、驚きました。生きていたのですか」

いやいや、もし死体でも踏んではいけないだろ。

逆光で素顔は分からないが、なぜかすごく残念そうな顔をして滑り台を降りた。

幹仁は慌てて飛び起きて滑り台を滑り、少女を追いかける。

「おいおい、謝りもしないでどこへ行く！」

「どこへって、今の時間帯は普通に学校ですが？」

「はあ？………っってお前は！？」

ここにきてようやく少女の存在に気づいた。
たしかこいつは女ナツルと同じクラスの……。

「委員長！？」

いつだか合コンした時以来だが覚えている。

一方、東田の言葉に少女は耳をうるさそうに塞いでいた。

「委員長って……。私はあなたのクラスの委員長になった覚えはないです。

もしかしてあなたは委員長萌とかそんな感じですか？

不潔です寄らないでください」

それに

「それにはなつきほの榊原美夜という親からいただいた素晴らしい名前がありますので」

榊原美夜？

そんな名前だったのか。

なんだか良い名前だと思う。

それより、どうでもいいが俺のこと忘れてるよね絶対。ずーんと暗い気持ちになった。

そんな幹仁を気にせず委員長……じゃなく、美夜は「ではこれだと丁寧にお辞儀をしてまた歩き出す。」

「あ！……ちょっと待て！」

幹仁もまた慌てて追いかける。

呼び止められた美夜はうんざりしたような顔で振り向いた。

「あなたもしつこいですねえ。何の用ですか？」

盛大なため息をつかれた幹仁は「ううっ！」と後退りしそうになるが留まる。

「ひ、人を踏んでおいて謝らないのはおかしいだろ？」

「はあ、分かりました。謝ればいいんですよね？」

なんだよその「私が譲歩しました」ってな態度は。

女性には優しい幹仁にしては珍しくイライラしている。

「ああ、そうだよ」

美夜は「そうですか」と言っつて腰を曲げた。

「サーセン」

「ちよつとまてえー！」

如何にも怠そつに頭を下げていた美夜は幹仁を睨む。

「何ですか、謝ったではないですか」

「はあ？それが謝ったって言えるのかよ！」

「はい、言えます」

「即答かよ・・・」

どうやら本気で言っているらしい。

「おいおい、誰だよこいつにこんなねじ曲がった道徳心を教えたやつ、ぐふおっ!？」

呆れているとひっぱたかれて後半が意味不明になる。

「あなた、私の母を侮辱する気ですか？」

明らかかなアホ面したあなたより1000,0000,0000000000倍は優秀な母を。それに初対面でこいつ呼ばわりなんて恋人気取りですか？

直ちに精神科で診てもらうことをおすすめします。

もうあなたに用はありませんのでさよなら」

次こそ美夜はスタスタと去っていった。

あのアマ、人をボロクソ言いやがって!

美夜を追いかける気力を無くして公園のベンチにドカッと座る。

「次会ったらビシッと行ってやる」

誰もいないのでただ消えるのみの眩きだが関係ない。

この時には、幹仁のナツルに対する憤りは、どこか遠くに消えていたのだった。

「「あつ」

その日の放課後、なぜか学校の図書室で美夜とバツタリ遭遇した。次会ったらって言ったがその日の内にとは……。幹仁はあのあとなんだかんだで学校へ戻り、教室にも寄らずに静かな図書室で読書とは名ばかりの睡眠をしながら時間を浪費した。そしていざ帰ろうとしたら……。ってなわけさ。

幹仁は小さくため息をついた。
同様に驚いていた美夜は咳払いをしてサラツと挨拶。

「あらあら、これはこれは。いつぞやのアホ面じゃないですか。それはそうと、呼吸をするのやめてくれませんか？酸素の無駄です。あなたが原因で温暖化が進んだらどう責任取るつもりですか？先に言っておきますが、身体で払うとか世迷い事をほざかないでくださいね？あなたの身体にたいした価値はありませんので」

うぐぐつ、よくもまあ。そうペラペラと減らず口を叩けるよな！
だが幹仁よ、キレてはならない。抑えてこそその漢だ。
そうやって喉の方まで出かかったものを飲み込む。

「ほう、そういうお前だって委員会はどうしたんだよ」

なるべくムカつくように言っただつもりだ。

それに対して美夜は可哀想な人を見る目で幹仁を見た。

「はあ？あなたはなに言ってるんですか。委員会が毎日あるわけないでしょ。」

そうですか、あなたは知能が足りないのですね可哀想に」

「こんちくしよー」。

なんだよ、次から次へと。
だ、だが、まだプッツンはしてないぞ。

「あなたに勉強を教える先生は大変ですね。こんな幼稚園児みたいな人の面倒を見るのですから」

プッツンは……。

「あなた、動いているだけで周りには不幸になります」

……。

「良かったですね。履歴書に書けますよ」特技は周りを不幸にすること『って。』

まあ、そんな事を書けば一発で落ちますけど」

プルプル

「それなら、あなたは土に還って野菜の栄養になるほうが世のため人のために出来る唯一のご奉仕ではないのですか？」

プチンっ！

「うがー！」

幹仁は我慢のし過ぎで獣のように叫ぶ。

「ぐうう、わうっわうっ！」

歯を剥き出しにして吠え続ける。

「本格的に壊れましたか」

美夜は気にとめていなかった。

「……」

なんだかひとりでこんなことをして虚しくなった幹仁は吠えるのをやめた。

「まあそんなことはどうでもいいんです」

自分で悪化させたくせにどうでもいいって。なんて嫌な性格。

「それよりひとついいですか？」

幹仁は唐突に聞かれた。

「なんだよ？」

初めてのまともな質問に内心びっくりした。

そして美夜は幹仁の目を見て一言。

「どいてください、邪魔です」

ウキヤー！

なんだよ、なんなんだよあの女！
さんざん人をバカにしやがって。

拳げ句の果てに邪魔だと？

あいつは何様だよ！

女王様か！？

なら俺は王様じゃボケエー！

ん？それじゃあ夫婦になるのか？んなわけあるかー！

……って、1人漫才してる場合だよ。

『幹仁！うるさい』

下の居間から母さんの怒鳴り声。

クソ、全部なにもかもあいつの所為だ。

恐竜が絶滅したのだってあいつの所為だきつと。

いいや、明日絶対にビシツと言ってやるもんね。……多分。いや、きつと。

その日も放課後になるとやっぱり美夜は図書室にいた。

幹仁が入ってくるなりすごく嫌そうな顔をした。

「よう、委員長殿」

「話しかけないください、今あなたの為にさける思考はありませんので」

「言うねえ。そんなにイライラしているのはカルシウムが足りないからか？」

「ならあなたに足りないのは知恵ですね」

「んじゃあ、お前に必要なのはお淑やかさか？」

「では、あなたは常識が足りません。猿並みです。いえ、猿にだってルールは存在しますから失礼ですね。ごめんなさいお猿さん」

た、耐えるのだ東田幹仁！
そんな幹仁を見て美夜は肩をすくめた。

「すみません、今から集会なので本当に忙しいんです。後にしてくれませんか？」

表情を見る限り、本当に忙しいようだ。
どうやら邪魔をしていたらしい。

「あ、すまん」

美夜は会釈をして歩いていった。

そうか、こいつはこいつなりに忙しいんだな。
悪いことした。

幹仁は心の中で謝った。

「では、会議を終わります」

三郷会長のその言葉で今日は解散になった。

美夜は資料を鞆にしまい、部屋から出て行く。

今日の話し合いはもうすぐ始まるクリスマス祭のことだ。

美夜は毎度気になるが、なぜクリスマスなのに12月の初旬なのか。
そもそもこの学校はキリスト教じゃないのに。

しかも何よりも美夜がショックなのはお金を稼げないことだ。

本部（先生）が言うにはクリスマスはめでたい日なのでお金を扱う
のはダメだとか。

よっぽど「あなたは妻にプレゼントを買ってあげないのですね。」

言葉だけで喜ぶのはマンガのヒロインだけですよ」と言っていてやりた
かったですね。

だが、決まってしまったなら仕方ありません。

かくなる上は裏で……」

「おい、地の文が洩れてるぞ腹黒」

うるさいですよアホ面。

呆れた口調で言われてムツとして毒つく。

どうやら美夜は地の文を声に出していたらしい。

振り向くとやはりそこにはやはりアホ面、東田幹仁がいた。

「まだいたのですね、どれだけ環境汚染を進行させる気ですか？」

「まだ言うか！」

「それより何をそこでしているのです？」

「お前が後にしろと言ったから待ってたんだろ？」

「そうですね、私は用がありませんので失礼します」

「くらくら、帰ろうとするな！」

「嫌です」

このアホ面はどうやら私を待っていたらしいです。

しかも私の言いつけ通りに。

まるで犬のようです。

「でポチ、何の用ですか？」

「おい、何だポチって」

「いいから続けてください」

「まあいいや。」

えっと、それなんだが……な……」

幹仁の言葉は途中で止まってしまった。

どうしたのかと見てみれば、視線が美夜の後ろに向いていた。

私は気になり後ろを見ると、そこには忙しそうに書類を整理しながら役員に指示を出している会長の姿があった。

それはまさにできる年上のお姉さんという感じで、同性ながらっこいい。

そりゃあ、モテるわけですよ。

会長が通れば全ての人間が振り向くらしいですからね。(新聞部より参照)

どうせこの男も……。

「……………っ!」

その他大勢のように見惚れているのかと思ったら違った。

幹仁は怖い顔で憎まし気に睨んでいる。このまま殴り込みかねない勢いだ。

「どうかしましたか?」

これでは危ないと思い、さり気なく幹仁の視線の先に移動して遮った。

そこでハツとしたように私を見た。

「いや、何でもない」

一瞬、泣き出しそうな辛い表情になったがそれきり消えた。

この表情は見たことがある。公園でだ。

何かあったのか、すべり台の上で泣きそうに……いや、実際に泣いていた。

それだけで何かあったのだろうか、特にどうとは聞かなかった。

それは無闇に自分が関わってはいけなと思ったから。

幹仁は誰に聞かすでもなく呟くように言った。

「あいつは何がしたかったんだろうか」

幹仁が言うあいつとはたぶんナツルの事だ。

美夜は幾度か仲良さそうに帰っている姿を目撃している。

淋しそうに響いた言葉に美夜は明確な答えはいらなことが分かっている。

「わかりません」

と、素っ気なく返した。

く番外編く ツンな彼女がデレるまで。(後書き)

番外編なのに続きそうです。

辛辣な口調のキャラほど書くスピードが上がるのはなぜでしょう？

もしかしたら私にそういう願望があるということですか。

最近は書いているといつの間にかエロ方向の話になりがちで困ります。

エロといえば、友達のリクエストでR18の零×ナツルSSを書いたら意外と好評でしたので、機会があれば載ましようかねえ。

愛と哀と……

雫は、飾りも何もない質素な自分の部屋に窓の遮光カーテンを閉めて暗くする。

そして、横のベッドに視線を移す。

そこでは悲しみが流れた跡を残す彼が寝ていた。

あの後、私は、彼を自分の家まで連れてきた。

あの場所からなら、彼の家の方が近かったのだが、今の状態では彼を独りにするのはとても出来ない。

「……ナツル？」

名を呼ぶが、しかし、自分にしか聞こえない程度の音量だ。

意味のない呼びかけだが、それでもしないとどこかに行ってしまう
そうで……。

思わず、彼の手を握っていた。

「ねえ……私があなたにしてあげられた事ってなにかしら」

返事はない。

「いつだかあなたが言ってたわね。」

『俺と違って雫はなんでも完璧だよな』って

彼の手を愛おしげに撫でたり両手で包んだり。

自分では気づいていないが、それは、自身を落ち着かせるためにしているのかもしれない。

「だけど、私は完璧なんかじゃないわ、どこにでもいるありふれた

普通の人間。

もし、あなたの言うとおりの完璧な人間だとしたら……」

「……あなたをこんなに悲しくさせない。

そう言おうとしたが、やめておく。

そんなことは前から判っていたことだから。

「あなたや、周りの人たちの望むような人間には、とてもなれそうにないわね」

何をすれば、みんながついてくるのか。

何をしたら、みんなが納得するのか。

ときどき、判らなくなる。

みんなのために。

ミンナノタメニ。

だけど、今からは、そうは言っていられない。

個人的な事かもしれないけど、私がしたいようにするのだから。

「こんなダメな私だけど、もう一度チャンスをくれる？」

返事はまた、ないが、手が少し震えた気がした。

それが、彼が肯定こつていしているようだった。

「ありがとうナツル」

わずかに微笑んで、彼のおでこにキスをしてから部屋を後にした。

いつからだろうか……。

彼を見かけるたびに目で追っていた。

最初はクラスの人と同じ名前だったから興味を持ったのだ。

第一印象はどこか頼りなくて男らしくない、と、あまり好印象ではなかった。

私の友達2人も、同じ意見のようだった。

それでも、私は彼に惹かれていった。

理由は……その内、考えるとしよう。

彼は図書室に居ることがよくあった。

この場所は、学校唯一の男女交流の場であり、私はたまたまそこに居合わせたのだ。

いや、正確には図書室ではなく、生徒会室に向かう所を見たのだ。

あそこにはいつもたくさんの人がいる。

たいていは、美人生徒会長こと、三郷雫と、学園のアイドル、沙倉楓を見に来ているのだ。

たしか、学園の3大お姉様だったっけ？

私はそんなに知らないが。

それぞれにファンや親衛隊が出来ていて、校内だけではなく、街中の、果ては県外の人たちまで参加しているとか……。

その彼女ら2人はお互いの派閥で牽制しあつて………なんてことはない。

どうやら昔からの幼なじみで親友らしい。

そのネタで我が校の漫画研究会が同人誌を創っていた。

私的には会長受けの沙倉攻めを推奨したい。

ああいう（会長）タイプは意外と押しに弱いから、沙倉の押しの強さで墮ちるはず。

クールからテレへのギャップがたまらんです。

……おっと、話がズレました。そんなレス……じやなくて、2人の方に彼は歩いて行った。

胸の奥でチクリと何かが刺さるようだ。

どうして？

この時は判らなかつた。

それから、幾度か、彼を見かけてそれを観察するようになった。

判ったことは、彼はどうやら会長ではなく沙倉の方を見ていること。ときどき、ばったり遭遇したらしどろもどろになってしまい、うまく話せなくなるといふかわいらしいもの。

……女の子に囲まれていること。

彼を見ていると温かい気持ちになること。

彼が女の子と話していると暗い気持ちになること。

私が彼のことを……。

その日、彼は図書室に、生徒会室前には来なかつた。友達の話では彼が沙倉に告白したらしい。

悲しくなった、苦しくなった、辛くなった。

何故、なぜ、なぜ！

その問いかけをベッドの中で繰り返した。

翌朝、私はクマがくつきり残るまぶたをこすって洗面台の鏡をのぞいた。

ひどい顔をしている。

ハハ、つと乾いた笑いが唇から漏れた。
見てただけ。

ただ黙って何をするでもなく見てただけ。
行動に移さず、ただずっと……。

その結果がコレだ。
今時の少女マンガでも一つや二つ、行動を起こしているだろう。
バカだ私は。

ホントの大バカ野郎だ。

ため息をついて、服を脱ぐ。

下着も全て。

バスルームに入り、シャワーで全身を濡らした。

冷水の状態だから身体がビクツと震える。

冷たい感触が頭から胸、お腹、足と流れていく。こんな辛い現実も
流れると祈りながら。

バスタオル一枚を身体に巻き付けて自室に行き、裸の状態ベッド
に倒れ込んだ。

固い毛布の布地が肌に刺さりチクチクする。

それを気にせずに毛布に顔をうずめてから仰向けになるように転が
る。

コツン、と手に何かがぶつかった。

それを掴み取って見ると、それは、コンパクトカメラだった。

スクープ写真を撮るために買ったものだ。

最初は、使い捨てカメラだったが、新聞部に売ったりしているうち
にランクUPした。

そうだ、気晴らしにスクープ探してもしようかな。

ベッドから起き上がり、服を着るためにタンスへ向かった。

スクープ探しなんて行かなければよかった。

私らしく悔しさにうちひしがれて部屋でこもってればよかった。

そうすれば、あんなもの見なくてすんだのに。

ソウスレバ、アンナモノミナクテストダノニ。

カメラのメモリーには、あの写真がまだ残っている。

なぜ消していないのかは、自分でもよく判らない。

消してしまえば、そんな事は始めからなかったということにできたのに。

消してしまえば、そんな事は始めからなかったという現実逃避ができたのに。

しなかった。

できなかった。

私らしくもない。

だけど、これだけは、なかつたことにはできないと判断してしまつたのだ。自分で。

「・・・」

自分の手首を掴んでいた手のひらをゆつくりと閉じて、力を込めた。指先が真っ白になるまで握りしめた。

すると、血が滲^{にじ}んできて、ポタポタと机に落ちては広がる。

憎^{にく}しみの色が広がり、止まらない。

外は、青みがかかり始めていた。

「・・・もうすぐ朝になる。」

愛と哀と……。(後書き)

久しぶりの更新なのに主犯の回想でがっかりしたと思いますが、これが無いと困るんです！

そろそろ、会長の活躍を書きたいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9927o/>

君が居た昨日、俺の見る明日。

2011年10月8日08時38分発行